

宗岡二中だより

5月号



令和5年5月1日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

心を通わせる

校長 伊藤大輔

着任して驚いたことがいくつかあります。初日の驚きは「あいさつ」です。不安で強張った表情の私にすれ違う生徒がすすんで「おはようございます。」とあいさつをしてくれました。準備登校前の集会で自己紹介したところ、2・3年生が暖かい拍手を返してくれました。会議の会場がわからずに校内をウロウロしていると「どうしましたか？」と何人かの生徒が笑顔で声をかけてくれました。日常の何気ない言葉のやりとりであり、当の生徒たちは至極当たり前なふるまっただけなのでしょうが、それぞれの場面で私の心はほっこりと温まりました。理由をあれこれ考えた結果、私とほんのわずかな時間を共有した生徒たちにある共通点を見出しました。それは相手の身になって考えようとしている態度です。

哺乳動物の中で、ゴリラやチンパンジー、オランウータンなどの類人猿はコミュニケーションを円滑に行うために表情筋を発達させたと言われています。とくにヒトは相手の表情を見ながらコミュニケーションを図ることで、相手の気持ちや考えを読み取る機能を発達させ、それが社会生活を発展させる原動力になったと考えられています。

冒頭の生徒たちは、私の表情や、おどおどとした雰囲気を読み取り、「心のコもった」言葉をかけてくれました。さらに笑顔を添えることで緊張も和らげてくれました。本当に嬉しかったです。

こうした温かいエピソードがある一方で、本校においてもメールやSNSによる言葉のやりとりが引き起こしたトラブルが起きています。人と人を繋ぐことを目的に、発展・進化を続けるこうした媒体は、気軽に速く情報をやりとりするには便利ですが、未成熟で脆弱な媒体でもあります。

私が幼かった頃、駅には「切符にはさみをいれてくれる」駅員さんがいました。改札を通ると「おはようございます」などの言葉を交わしました。今は「ピー」という自動改札を通過する無機質な音がせわしなく響くだけです。買い物にしても、店員さんと対面でやりとりする機会がめっきり減りました。代わりに

無人のセルフレジが増えています。

ヒトは他の動物と異なり、白眼を大きく発達させました。相手の表情が読み取りやすくなる進化と考えられています。白眼が多いと瞳がどこを見ているかすぐに分かるのです。目は対面コミュニケーションを成功に導くために極めて重要な役割を果たしています。目の動きを見ながら、相手の心の動きを知り、それがヒト特有の信頼関係を育み高度で複雑な社会形成の実現につながったのです。

最近は誰もが電子機器(スマホ等の端末など)での、やり取りを優先するあまり目を合わせて会話する機会が減っているとも言われます。目を合わせることもなく、声を聞くこともなく、ましてや相手の表情を見るわけでもなく、機械を使った文字や記号だけで本来的な意思の疎通を図ることはできるのでしょうか。

人間と機械との関係に思いを巡らせていると、喜劇王チャーリー・チャップリンが70年以上前に自身初のトーキー映画の中で行った演説の一部を思い出しました。印象に残った部分を訳してみます。

「私たちはスピードを開発したが、それによって自分自身を孤立させた。ゆとりを与えてくれる機械によって、貧困を作り上げた。知識は私たちを皮肉にし、知恵は私たちを冷たく、薄情にした。私たちはあまりに考え過ぎるので、感じる力が衰えている。私たちには、機械よりも人類愛が必要なのだ。賢さよりも、優しさや思いやりが必要なのだ。そういう感情がなければ、世の中は暴力で満ち、全てが失われてしまう。」

(『独裁者』(1940)より)

宗二中学生には「心を通ったコミュニケーション」を大切にしてほしいと切に願っています。

学校が始まり、およそ一か月が経過しました。思っている以上に心や体は疲れているものです。もうすぐ連休。すこしの時間ですが学校を離れることとなります。ゆっくり過ごして、英気を養ってください。